

見返し対処の心理的要因の検討—競争心、自己効力感との関連について—

岸田 萌*・池田 浩之**

本研究は、大学生134名を対象に、怒りに関する尺度、多面的競争心尺度、特性的自己効力感尺度を用いた質問紙調査を行った。

本研究では、仕返し対処との比較を通じて、怒り、あるいは競争心、自己効力感が見返し対処志向性に及ぼす影響を検討した。その結果、怒りの自己陳述、自己効力感が見返し対処志向性に正の影響を与え、過競争心が見返し対処志向性に負の影響を与えていた。このことから、仮説が一部支持された。

今後の課題としては、今回用いた場面以外の怒り喚起場面での見返し対処志向性の要因の検討や、他の対処を行う場面と見返し対処を行う場面の比較が重要だといえる。

キーワード：見返し対処，怒り，競争心，自己効力感

1. 目的

怒り(Anger)とは、自分自身の気持ちや身体を、物理的、社会的に攻撃されたり、侵害されたことによって生じるフラストレーションから起こる、ネガティブな情動のことである(光藤, 2014)。Verres & Sobes(1980)は、怒りの機能を個人にとって機能的に作用するか、あるいは個人の妨害や侵害と言う意味で不適切に機能するかの基準で評価する事を提唱した。加えて、多くの怒りの機能がポジティブに作用するとも述べている。

怒りの機能は、ポジティブに作用する側面が多くあると言われている。しかし、こうした怒りの健康への影響について検討した研究では、個人の妨害や侵害と言う意味で、怒りが不適切に機能する側面に注目しているものが多い(鈴木・春木, 1994; Gallacher et al., 1999)。湯川(2008)は、怒りは一般的にあまり感じたくないもの、良くないものにとらえがちだが、怒りの適応的な側面から怒りを見直すことで、怒りをうまく生かして怒り自体をなくしていくことができると述べている。怒りの適応的な側面として、見返し対処が挙げら

れる。

「見返し対処」とは、怒りが喚起された際に、怒りの対象者を見返そうと考え、自身が努力行動を行い、直接対象者に表出しない自己完結的な対処のことである(関屋・小玉, 2013)。これまでの研究では、主に見返し対処の効果と、性格特性に関するものが多い。しかし、「見返す」という言葉の意味に言及したもの、努力行動における個人内の資源を言及した心理的要因に注目した研究は少ない。そのため、見返し対処の心理的要因を上記の二点から検討する必要がある。

また、見返し対処に関する研究では、仕返し対処と比較されることが多い(関屋・小玉, 2009; 関屋・小玉, 2011; 関屋, 2011a; 関屋, 2011b; 関屋・小玉, 2012; 関屋・小玉, 2013)。仕返し対処とは、怒りが喚起された際に、怒りの対象者にされたことを、同じようにやり返す直接的な対処のことである。

「見返す」とは、広辞苑第六版では「あなどられたなどした仕返しに、立派になって相手に見せつける」という意味である。つまり、自分が以前の自分より、あるいは相手が想定している自分や相手よりも優位に立っている状態になりたいという欲求が生じると考える。この欲求と類似した欲

* KID ACADEMY脳科学児童デイサービス

** 兵庫教育大学発達臨床研究センター

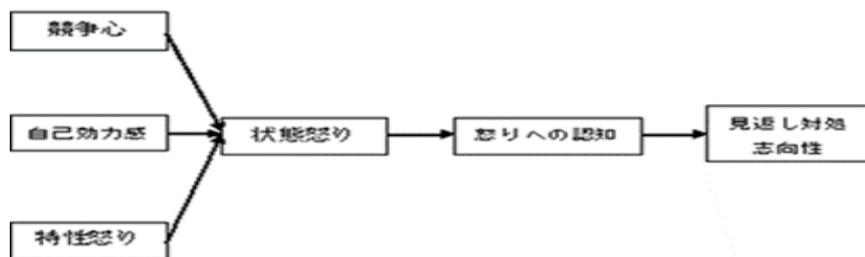


Figure 1 見返し対処のモデル図

求として、競争心が挙げられる。競争心は、様々な定義がなされているが、古畑(2000)は、個人が、目標達成に関して、相手と競い合って相手に優越し、凌駕し、勝利を収めようとする欲求と定義した。競争心は、高まりすぎれば相手に対して無関心、あるいは非常になりやすく、目標達成が失敗すると反省よりも相手への敵意が高まるとされている(古畑, 2000)。しかし、一方で、競争心が高まれば、活動が活性化し、目標達成への欲求が高まり、現実検証の契機となりえるとされている(古畑, 2000)。怒りを向ける対象者をライバルとし、相手を見返そうと考えた際には自分の中で競争が始まり、自分が相手よりも優位に立っている状態になるために努力行動を行うとすることができる。よって、見返し対処と競争心に関連があると推測される。一方で、仕返し対処の場合、相手を敵だと捉えやすく、“相手に勝つ”というよりも“相手にも自分と同じ思いをさせてやる”といった攻撃への意識が高いと考えられる。

次に、見返し対処を行う際、見返すだけの能力が自分にはないと考え、見返し対処を行おうとする傾向は低くなる。そこで、個人内の資源として、自己効力感を取り上げる。自己効力感とは、個人がある状況において必要な行動を効果的に遂行できる可能性の認知である(成田ら, 1995)。自己効力感は、高いほど目標としている行動に挑戦しようと努力する傾向を示し、また自己効力感が低いほどあまり努力をしない傾向にある(Bandure & Cervone, 1983)。つまり、自己効力感が高いほど、“相手を見返す”という目標に挑戦するといえる。仕返し対処の場合、相手を見返すだけの能力が自分にはないと考えるため、見返し対処では

なく仕返し対処を行うと考えられる。怒りが喚起される場面は日常でよくみられるため、長期的で一般化した日常場面における行動に影響する特性的自己効力感を取り上げる。

本研究では、怒り、あるいは競争心、自己効力感が見返し対処志向性に及ぼす影響の検討を目的とする。なお、本研究では、淡野(2008)は倫理問題の配慮を考え、場面想定法を用いる。そして、より見返し対処の心理的要因を明確にするために、見返し対処と仕返し対処の比較を行う。

日比野・吉田・湯川(2007)のモデルを参考に、見返し対処のモデル図をFigure 1に示す。個人の特徴として競争心、自己効力感、特性怒りが存在する。怒りが喚起される状況では、状態怒りが喚起され、感じた怒りに対する認知が生じる。例えば、「他者からの不当な扱い」だと怒りを捉えた場合、怒りを向ける相手を見返そうとする見返し対処志向性に繋がると考えられる。

2. 調査 I

目的

調査IIで調査を行う集団の特性、怒りが喚起されていない状態の把握を目的とする。

方法

(1)分析対象者

F大学の学部生134名に質問紙を配布し、116名(男性40名、女性69名、不明7名)から有効な回答を得た。

(2)手続き

調査に先立ち、本研究は強制的なものではない点、個人のデータが本論文でしか用いられない点などを伝えた。

(3)調査時期

2018年7月に実施した。

(4)測定材料

(a) ASSQ(増田・金築・関口・根建, 2005)

怒りを認知的な側面から捉えるため、ASSQ(増田・金築・関口・根建, 2005)25項目を用いた。ASSQは、「他者からの不当な扱い」「敵意に満ちた考え」「報復の正当化」「自己への叱責」「他者への非難」の5つの下位尺度5項目からできており、5件法で回答を求めた。

(b) 多面的競争心尺度(太田, 2010)

競争心について測定するため、多面的競争心尺度(太田, 2010)21項目を用いた。多面的競争心尺度は、「手段型競争心」「負けず嫌い」「社会的承認」「過競争心」「競争回避」の5つの下位尺度から構成され、順に7項目、4項目、3項目、4項目、3項目であった。また、5件法で回答を求めた。

(c) STAXI(鈴木・春木, 1994)

特性的な怒り、一時的な怒りの測定ため、STAXIの邦訳版(鈴木・春木, 1994)20項目を用いた。STAXIは、State Anger Scale, Trait Anger Scale, AXという下位尺度があり、State Anger Scale, Trait Anger Scale各10項目を、4件法で回答を求めた。

(d) 特性的自己効力感尺度(成田ら, 1995)

特性的自己効力感(成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田, 1995)23項目を5件法で回答を求めた。

(5)倫理的配慮

本研究は、兵庫教育大学倫理審査委員会の承認を得ている(承認番号:2018-30)。

結果

(1)変数間の相関

各下位尺度の得点を用いて相関係数を算出した。特性的自己効力感では、状態怒りや特性怒り、怒りを認知的な側面から捉えた場合には有意な相関は見られなかった。しかし、「手段型競争心」($r=.44, p<.001$), 「負けず嫌い」($r=.38, p<.001$), 「社会的承認」($r=.21, p<.05$)と正の相関が、「競争回避」($r=-.48, p<.001$)と負の相関が見られた。また、多面的競争心尺度の下位尺度では、「手段型

競争心」は「報復の正当化」($r=.21, p<.05$), 「負けず嫌い」は特性怒り($r=.26, p<.05$), 「敵意に満ちた考え」($r=.18, p<.05$), 「報復の正当化」($r=.35, p<.001$), 「自己への叱責」($r=.29, p<.05$), 「他者への非難」($r=.18, p<.05$), 「社会的承認」は特性怒り($r=.19, p<.05$)と「報復の正当化」($r=.32, p<.001$), 「過競争心」は状態怒り($r=.24, p<.05$), 「他者からの不当な扱い」($r=.30, p<.05$), 「敵意に満ちた考え」($r=.22, p<.05$), 「報復の正当化」($r=.49, p<.001$)と正の相関が見られた。

(2)男女間での比較

また、性差を見るために対応のない検定を行った。その結果、状態怒りは女性より男性が($t(107)=2.41, p<.05$), 特性怒りは女性より男性の方が($t(107)=3.56, p<.01$), 「過競争心」は女性より男性の方が高かった($t(107)=3.95, p<.01$)。

考察

まず、特性的自己効力感が手段型競争心と負けず嫌い、社会的承認との間に正の相関があり、競争回避と負の相関が見られたことから、自分ができるといふ感覚があることで、競争について肯定的な印象、あるいは意欲的に捉えていると考えられる。また、負けず嫌いが、特性怒り、他者からの不当な扱い以外の怒りの自己陳述尺度の下位尺度と正の相関が見られたことから、負けず嫌いな人は特性的に怒りを感じやすく、怒りを認知的に捉える傾向が強いと考えられる。社会的承認が、特性怒りとの間に正の相関が見られたことから、特性的に怒りやすい人は、社会に認められることを意識しやすいといえる。過競争心は、状態怒り、他者からの不当な扱い、敵意に満ちた考え、報復の正当化と正の相関が見られたことから、衝動的な怒りや、怒りの対象者に敵意を向けるような考えをしやすいと考えられる。そして、報復の正当化は、手段型競争心と負けず嫌い、社会的承認、過競争心と正の相関が見られた。競争する場面に抵抗を覚えない人は、怒りが喚起された時相手にやり返すことが正しいと考える傾向があるといえる。

加えて、性差の検討では、状態怒りと過競争心

は女性より男性が、報復の正当化は男性の方が女性より有意に高かった。過競争心に関しては、男性と女性で、怒りの表出方法が異なることとの関連がある。なお、以上のことは、因果関係について考察しているが、もう片方からの因果も考えられる。

3. 調査II

目的

怒り感情喚起場面における怒り、あるいは競争心、自己効力感が見返し対処に及ぼす影響の検討を目的とする。

方法

(1)分析対象者

F大学の学部生134名に質問紙を配布し、記入漏れ等を除いた大学生109名(男性34名、女性74名、不明1名)、調査I、IIでマッチングできた70名(男性19名、女性51名)のデータを解析に用いた。

(2)手続き

調査に先立ち、本研究は強制的なものではない点、個人のデータが本論文でしか用いられない点などを伝えた。

(3)調査時期

2018年7月に、本調査Iの実施1週間後に実施した。

(4)測定材料

本調査Iで用いた(a),(c)を用いた。

(a) ASSQ(増田・金築・関口・根建, 2005)

(c) STAXI(鈴木・春木, 1994)

(e)イメージの明瞭度

提示した怒り喚起場面について、「全くイメージできなかった(1点)」から「はっきりイメージできた(5点)」の5件法で用いた。

(f)怒り強度

「全く感じない(1点)」から「非常に感じる(5点)」の5件法で回答を求めた。また、本研究では、「怒りの程度」とした。

(g)対処志向性

仕返し対処を行った場面、見返し対処を行った

場面、「全くしない(1点)」から「必ずする(7点)」の7件法で回答を求めた。

(h)場面設定

関屋・小玉(2013)の場面を元に場面設定を行った。

怒り喚起場面:「Aさんは、大学であるサークルに所属しています。いつものように、放課後みんなで集まって練習しているところに、Bが通りがかりました。BはAさんが練習しているのに目をとめると、ぷっと吹き出し、「Aはレベル低いなあ、練習したって無駄なんじゃないの」と言って、そのまま笑いながら立ち去ってしまいました。

仕返し対処:「Aさんは、笑いながら去って行ったBに強い怒りを感じました。そして、「Bも同じ目にあわせてやろう」と心に決めました。その後、AさんはBが練習しているところに通りがかり、Bに言われたことと同じことを言って立ち去りました。

見返し対処:「Aさんは、笑いながら去って行ったBに強い怒りを感じました。そして、「Bを見返してやろう、Bよりも上手くなってやろう」と心に決めました。その後、Aさんは今までにも増して一生懸命練習に取り組みました。非常に集中していたので、いつもの練習終了時間をだいぶ過ぎてから、やっとそのことに気づいたほどでした。練習を終え、Aさんは家へ帰ることにしました。

なお、質問紙では、それぞれの場面で、運動部と文化部の絵を教示文と共に提示し、合計で6枚の絵を用いている。なお、調査実施者が教示文を読み上げる方式で行った。

(5)倫理的配慮

本研究は、兵庫教育大学倫理審査委員会の承認を得ている(承認番号:2018-30)。

結果

(1)変数間の相関

仕返し対処における変数間の相関係数を算出した結果、仕返し対処志向性では、特性怒り($r=.30, p<.01$),「社会的承認」($r=.33, p<.01$),「報復の正当化」($r=.36, p<.01$)との間に正の相関が見られた。見返し対処における変数間の相関係数を算出

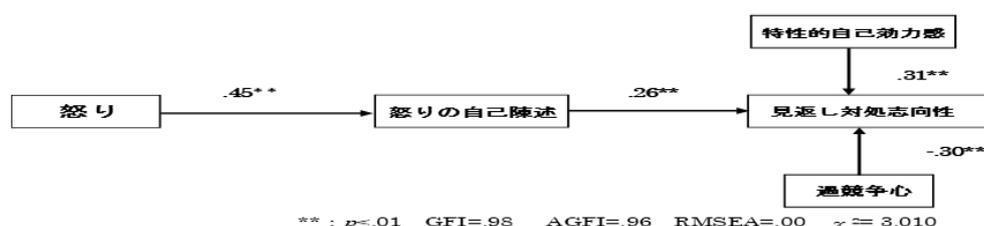


Figure 2 見返し対処志向性の最適モデル

した結果、見返し対処志向性では、「手段型競争心」($r = .36, p < .01$)、「自己への叱責」($r = .33, p < .01$)と正の相関が見られた。「過競争心」($r = -.31, p < .01$)に負の相関が見られた。

(2)男女間、および志向性間での比較

性差を見るために、対応のないt検定を行った。その結果、「過競争心」は女性より男性が($t(70) = 3.00, p < .01$)、場面提示されていない状態での「報復の正当化」は女性より男性の方が高かった($t(70) = 3.82, p < .01$)、

続いて、対処志向性の比較を行うために、対応のあるt検定を行った。その結果、仕返し対処志向性より見返し対処志向性の得点の方が高かった($t(70) = -9.93, p < .001$)。

(3)分散分析

また、場面提示の有無、提示場面の違いによる変数間の比較を行うため、一要因分散分析を行った。その結果、状態怒りと怒りの自己陳述尺度の下位尺度それぞれで主効果が見られたため、多重比較を行ったところ、状態怒り($F(2,138) = 75.96, p < .001$)、「他者からの不当な扱い」($F(1.81,124.65) = 33.27, p < .001$)、「敵意に満ちた考え」($F(1.59,109.88) = 31.87, p < .001$)は、仕返し対処場面、見返し対処場面、場面提示無しの場合で得点が高かった。また、「報復の正当化」($F(1.84,126.74) = 16.71, p < .001$)と、「他者への非難」($F(1.66,114.47) = 15.84, p < .001$)は、仕返し対処場面の方が場面提示無しより、仕返し対処場面の方が見返し対処場面より得点が高かった。そして、「自己への叱責」は、見返し対処場面より仕返し対処場面の方が高かった($F(1.84,127.11) = 3.63, p < .05$)。

(4)重回帰分析

それぞれの対処志向性に、どの変数が影響を与えているかを検討するため、単重回帰分析を行った。その結果、仕返し対処志向性では、特性怒り($\beta = .34, p < .01$)、報復の正当化($\beta = .38, p < .05$)で、有意な正の標準偏回帰係数が認められた。また、見返し対処志向性では、過競争心($\beta = -.34, p < .01$)で、有意な負の標準偏回帰係数が認められた。

(5)モデルの検討

各要因と仕返し対処志向性及び見返し対処志向性との関連について検討するために共分散構造分析を行った。仕返し対処志向性において、本研究の仮説モデルの値は良好ではなかった。そのため、特性的自己効力感と競争心がそれぞれ仕返し対処志向性に影響するモデルを作成した。修正した適合指標は、 $\chi^2 = 17.792 (p < .001)$, GFI = .91, AGFI = .78, CFI = .73, TLI = .54, RMSEA = .17であった。適合度としては良好ではない値を示したが、仕返し対処と見返し対処との比較のため、作成したモデルを取り上げた。

見返し対処志向性において、本研究の仮説モデルの適合指標は良好ではなかった。そのため、特性的自己効力感と競争心がそれぞれ見返し対処志向性に影響するモデルを作成した。しかし、モデルの適合指標が良好ではなかったため、状態怒りと特性怒りを合わせて「怒り」とし、怒り競争心の下位尺度それぞれが見返し対処志向性に影響するようなモデルを作成し検討した。また、そのモデルの適合指標も良好ではなかったため、重回帰分析の結果を踏まえ、影響していないと考えられる「過競争心」以外の下位尺度を削除したモデル

を作成した。作成したモデルの適合指標は、 $\chi^2 = 3.010$ ($p < .808$), GFI=.98, AGFI=.96, CFI=1.00, TLI=1.18, RMSEA=.00であった(Figure 2)。適合度としては良好な値を示し、最適モデルとして採択した。推定値は、1%水準で怒り感情が怒りの自己陳述に、怒りの自己陳述、特性的自己効力感が見返し対処志向性に正の影響を、過競争心が負の影響を与えていた。

考察

(1)見返し対処

見返し対処志向性では、特性的自己効力感、手段型競争心、他者からの不当な扱いと敵意に満ちた考え、自己への叱責との間に正の相関が、過競争心と競争回避との間に負の相関が見られた。特性的自己効力感との関連については、自己効力感が高いほど、“相手を見返す”という目標に挑戦するという仮説からもいえる。他者からの不当な扱いと敵意に満ちた考え、自己への叱責との関連について、傷つきの程度が大きいほど見返し対処を行いやすいということから(関屋・小玉, 2011)、相手に対して怒りを向け、自分が傷つけられたと感じるが、自分自身の至らなさにも目を向けることが見返し対処と関連があると考えられる。そして、手段型競争心と過競争心、競争回避との関連について、見返し対処は努力行動を行うことによって見返し内容の向上・評価変容につながり、満足感を得るというプロセスがある(関屋・小玉, 2012)。よって、競争に対して肯定的に捉えつつも、勝つことではなく競争によって得られるパフォーマンスの向上等が重要だと捉えることが見返し対処を行いやすい傾向と関連があるといえる。

次に、見返し対処志向性と過競争心で、有意な負の標準偏回帰係数が認められた。過度な競争心は、他者と比較しがちになるだけでなく、相手に対して無関心、あるいは非情になり、勝つことにこだわり過ぎるために従事する活動や仕事の本質的な価値を見失いやすくなるとされている(古畑, 2011)。そのため、勝つことにこだわり過ぎて見返し内容の本質的な価値を見失い、相手に無関心あるいは非情になることで、“もっとできるよう

になりたい”という見返し内容の向上、“認められない”“見返したい”という相手や周囲の評価に意識がいかなくなり、見返し対処志向性を抑制すると考えられる。

そして、本研究の仮説モデルの適合指標は良好ではなく、伊藤・新藤(2003)や加藤(2001)のモデルを参考に検討し直したモデルの適合指標は、見返し対処のモデルでは、適合度としては良好な値を示し、最適モデルとして採択した。推定値は、1%水準で怒り感情が怒りの自己陳述に、怒りの自己陳述、特性的自己効力感が見返し対処志向性に正の影響を、過競争心が見返し対処志向性に負の影響を与えていた。本研究の仮説モデルは、自己効力感や競争心といった特性的な要因が怒りと見返そうという考えに影響を及ぼすと予想していた。しかし、結果から、自己効力感や競争心が怒りに影響を及ぼすのではなく、見返そうという考えに直接影響を与えていると考えられた。加えて、過度な競争心は、見返し対処を行おうとするプロセスを阻害する可能性も示唆された。本研究では、様々な側面から競争を捉えた尺度を用いた。しかし、仮説モデルにおいて、具体的にどんな競争心が見返し対処に影響を及ぼすのかが示されていない。

(2)仕返し対処と見返し対処の比較

志向性の得点の比較では仕返し対処志向性より見返し対処志向性の得点の方が高かった。これは、仕返し対処より見返し対処の方が行きやすいということであるといえる。

さらに、提示場面による比較の結果、状態怒り、他者からの不当な扱い、敵意に満ちた考えは、仕返し対処場面、見返し対処場面、場面提示無しの順で得点が高かった。よって、場面提示によって怒りが喚起され、相手の態度によって自身が被害を受けている、あるいは敵意を向けられていると感じることが示唆された。状態怒りに関しては、見返し対処の方が仕返し対処より状態怒りの得点が大きく低減したという結果からもいえる(関屋・小玉, 2012)。また、報復の正当化と、他者への非難は、仕返し対処場面の方が場面提示無しより、

仕返し対処場面の方が見返し対処場面より得点が高かった。これは、相手に報復することが正しいと考え、相手の態度に怒りを向ける傾向は、見返し対処を行う場面では、怒りが喚起されていない状態といえる。そして、自己への叱責は、見返し対処場面より仕返し対処場面の方が、得点が高いことから、関連では見返し対処志向性と自己への叱責との関連が見られたものの、仕返しを行う場面の方が、見返しを行う場面より自身に怒りを向けやすいといえ、見返し対処を行う場面で過度な自己への叱責が見られない事が示唆された。

そして、見返し対処志向性のモデルでは、怒りの自己陳述は見返し対処志向性に正の影響を与えていた。よって、仕返し対処を行う場合、自分の怒りについて特に考える必要はないといえる。

4. 研究の限界

研究の限界としては、今回は質問紙であらかじめ怒りが喚起される場面を想定するため、質問紙と実際の反応が異なる可能性が考えられる。また、怒りが喚起される場面は、文化や社会の流れ、個人の特性によって多様であり、本研究で想定した場面に限定されない。そのため、今回想定した場面以外での怒り喚起場面では、見返し対処及び仕返し対処の効果、あるいは心理的要因が異なると考えられる。今後の課題としては、今回用いた場面以外の怒り喚起場面での見返し対処志向性の要因の検討が必要となる。また、調査対象の範囲を拡大し、年齢層ごとの比較も考えられる。そして、“気にしない”“忘れる”といった他の対処場面と見返し対処を行う場面の比較が重要だといえる。

5. 引用文献

阿部晋吾・高木修(2005). 怒り表出の対人的効果を規定する要因：怒り表出の正当性評価の影響を中心として 社会心理学研究 21, 1, 12-20
 淡野将太(2008). 置き換えられた攻撃の誘発(TDG)に及ぼす誘発者及び攻撃対象者の地位の影響 教育心理学研究 56, 2, 182-192
 江本リナ(2000). 自己効力感の概念分析 日本看

護科学学誌 20, 2, 39-45

金築智美・金築優・根建金男(2008). 大学生の怒り特性の変容に及ぼす認知行動療法の有効性—怒りの対処スタイルの個人差を考慮した認知的技法を用いて— 教育心理学研究 56 193-205

古畑和孝「競争心」(2000). 詫摩武俊・鈴木乙史・清水弘司・松井豊(編)『シリーズ・人間と性格 第3巻 性格と対人関係』ブレーン出版 251-267

光藤崇子「基本情動」(2014). 下山晴彦(編)『誠信 心理学辞典 [新版]』誠信書房, 309

遠藤寛子(2009). 怒り経験の筆記が精神的健康に及ぼす影響 感情心理学研究 17, 1, 3-11

日比野桂・湯川進太郎(2004). 怒り経験の鎮静化過程—感情・認知・行動の時系列的変化— 心理学研究 74, 6, 521-530

日比野桂・吉田富二雄・湯川進太郎(2007). 怒り表出行動に対する抑制要因の分析 筑波大学心理学研究 33, 43-49

平野美沙・湯川進太郎(2013). マインドフルネス療法の怒り低減効果に関する実験的検討 心理学研究 84, 2, 93-102

井澤修平・長野祐一郎・依田麻子・児玉昌久・野村忍(2004). 敵意性と怒り喚起時の心臓血管反応性の関連 生理心理学と精神生理学 2004 22, 3, 215-224

伊藤崇達・神藤貴昭(2003). 自己効力感, 不安, 自己調整学習方略, 学習の持続性に関する因果モデルの検証 —認知的側面と動機づけ的側面の自己調整学習方略に着目して— 日本教育工学雑誌 27 4 377-385

加藤司(2001). 対人ストレス過程の検証 教育心理学研究 49 295-304

増田智美・金築優・関口由香・根建金男(2005). 怒りの自己陳述尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 行動療法研究 31, 1, 31-44

松原秀樹(1983). リラクセーションの基礎と実際—自律訓練法と筋弛緩法— 適性科学研究センター (Matsubara, H.) 88-98

成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐

- 藤眞一・長田由紀子(1995).特性的自己効力感尺度の検討—生涯発達の利用の可能性を探る— 教育心理学研究 43, 3,306-314
- 大野和代(2000).日本人の怒りの表出方法とその对人的影響 70, 6, 494-502
- 太田信幸(2002).ライバルの肯定的側面と否定的側面の検討(3):達成動機・充実感との関連 日本性格心理学会発表論文集 11 26-27
- 太田信幸(2010).多面的競争心尺度作成の試み 現代教育学部紀要 2, 3, 57-65
- Schwenkmezger,Steffgen,&Dusi 市村操一(訳)(2004) 怒りのコントロール—認知行動療法理論に基づく怒りと葛藤の克服訓練— ブレーン出版 27
- 関屋裕希・小玉正博(2009).怒り感情の鎮静には仕返しが有効か,見返しが有効化? 日本心理学会大会発表論文集 73 1023
- 関屋裕希(2010).ハーディネスが見返し対処志向性に与える影響の検討 日本パーソナリティ心理学会発表論文集 19, 75
- 関屋裕希(2011a).本来感・自己愛傾向と見返し対処志向性・仕返し対処志向性との関連 日本パーソナリティ心理学会発表論文集 20, 32
- 関屋裕希(2011b).怒り感情喚起・持続傾向と見返し対処志向性と仕返し対処志向性との関連の検討 日本パーソナリティ心理学会発表論文集 19, 75
- 関屋裕希・小玉正博(2011).人が見返し対処を行う状況要因の検討—怒り感情喚起後の対処として,仕返し対処との比較から— 筑波大学心理学研究 41, 83-89
- 関屋裕希・小玉正博(2012).人が見返すプロセスの検討—怒り感情喚起後の対処として,仕返しプロセスとの比較から— ヒューマン・ケア研究 12, 2, 109-120
- 関屋裕希・小玉正博(2013).怒り感情喚起後の見返し対処が大学生の対人適応に与える影響の検討—仕返し対処の比較から— ヒューマン・ケア研究 13, 2,134-145
- 新村出(編)(2008).『広辞苑 第六版』岩波書店 2681
- 鈴木平・春木豊(1994).怒りと循環器系疾患の関連性の検討 健康心理学研究 7, 1, 1-13
- 湯川進太郎(2008).『怒りの心理学—怒りとうまく付き合うための理論と方法』有斐閣 25, 80, 89, 90

Examination of psychological factors of prove-oneself-right coping -Relationship with competitiveness and self-efficacy-

Mei KISHIDA*, Hiroyuki IKEDA**

*KID ACADEMY Special Needs Education, Hyogo University of Teachers Education

**Center for Reseach on Human Development and Clinical Psychology, Hyogo University of Teachers Education

This study was a questionnaire survey of 134 university students using an anger scale, a multifaceted competitiveness scale, and a characteristic self-efficacy scale. In this study, we examined the effects of anger or competitiveness and self-efficacy on prove myself coping through comparison with revenge handling. As a result, self-statement of anger and self-efficacy had a positive effect and overcompetitiveness had a negative effect on prove oneself right coping. This partially supported the hypothesis. As future issues, it can be said that it is important to examine the factor of prove oneself right coping in the anger-raising scene other than the scene used in this study, and to compare the scene where other countermeasures are performed.

Keywords: prove oneself right coping, anger, competitiveness, self-efficacy